

生涯スポーツ実践者の育成を目指した大学体育授業の意義

—— 運動行動の変容と主観的恩恵に着目して ——

乳井 勇二¹⁾ 藤井 一貴¹⁾ 日高 裕介¹⁾ 竹内 孝文²⁾

The Significance of University Physical Education Classes Aimed at Cultivating Lifelong Sports Practitioners:

Focusing on Changes in Exercise Behavior and Subjective Benefits

Yuji Chichii Kazuki Fujii Yusuke Hidaka Takafumi Takeuchi

Abstract

This study aimed to develop lifelong sports practitioners, and examined the effects of university physical education classes that applied a sports education model on changes in exercise behavior and subjective benefits. As a result, 22% of students improved in the stage of change in their exercise behavior, 17.9% declined, and 56% showed no change. Regarding subjective benefits, categories such as "thinking skills," "teamwork," "communication," "knowledge, skills, importance, enjoyment, and effectiveness of exercise and sports," "fair play," "knowledge and skills of parasports," "cooperation with peers," and "expanding human relationships" were commonly extracted in all groups. It was revealed that students whose stage of change in exercise behavior was declining recognized changes in their physical condition due to factors such as lack of exercise. It was also shown that the use of the sports education model may have helped them recognize "thinking skills," "cooperation with peers," and "fair play." From the above, it is suggested that applying the sports education model to university physical education classes at the beginning of adulthood may contribute to the development of lifelong sports practitioners.

key words: university physical education classes, lifelong sports, subjective benefits, changes in exercise behavior, sports education models

キーワード: 大学体育授業, 生涯スポーツ, 主観的恩恵, 運動行動の変容, スポーツ教育モデル

I 緒言

1 大学体育授業の必要性

スポーツ戦略立国の目標には、生涯スポーツの実現に向けて成人の運動実施に向けた具体的な目標が示されている(文部科学省, 2010)。しかし、2023年度における20歳以上の週1日以上

のスポーツ実施率は52.0%であり前年度からも0.3ポイント減少している(スポーツ庁, 2024)。これらの課題を解決していくには、成人に突入する年代となる大学などの高等教育機関の役割は大きく、最後の教育機関でどのように運動・スポーツに関わっていくかにより、将来の運動・スポーツへの関わり方に大きな影響を及ぼすことが考えら

1) 育英大学教育学部教育学科スポーツ教育専攻

2) 尚絅学院大学心理・教育学群学校教育学類

れる。このような中、体育・スポーツ系の大学に関わらず、体育授業は多くの大学で実施され、体力や健康に関するさまざまな観点から研究が進められている^{注1)}。

村山(2024)は、大学体育は「身体」と「スポーツ」を扱いながら、学生への「人間形成」「健康教育」「スポーツ文化の理解と実践」にその意義が見いだされてきたと述べており、授業内でスポーツの競技種目を実践し、体力的な要素の改善を目的とするだけでなく、上記で記されているようにスポーツを通じてさまざまな資質能力を身に付けていくことが求められている。現在ではさまざまな目的で実践されている大学体育授業によって、受講している大学生が授業を通じてどのような恩恵を受けているのか、授業の受講が運動習慣に影響があるのかなどについても検討されている。

西田ほか(2015)は、大学体育授業において主観的恩恵をテキストマイニングによってキーワードの抽出、頻度や出現率を集計し、運動行動の変容段階別にみた主観的恩恵の平均出現数の差異について検討している。その結果、性や運動習慣によって主観的恩恵が異なる可能性を示唆している。この他にも石原ほか(2022)が大学体育授業における主観的恩恵について検討しており、テキストマイニングによって分析した研究が行われている。^{注2)}

荒井ほか(2009)は、大学生を対象とした体育授業において、運動行動の各変容ステージに対応して、介入する体育授業プログラムを実施した結果、運動行動の変容ステージの前進に好ましい影響を与える可能性が示されたと報告している。また、益川ほか(2012)は女子美術大学生を対象として体育授業の実施が運動行動の変容ステージに与える影響について講義群よりも実技群において変容ステージが前進する割合が高く、変化なしの者の割合が少なかったと報告している。運動行動の変容ステージに着目した研究については、授業の目的や細かい内容については明らかになって

いないものが多く、どのような授業内容によって効果が得られたのかなどについては課題が残る。

大学体育に関する先行研究では、主観的恩恵に着目した研究や運動行動の変容ステージに着目した研究が蓄積されてきた。一方で、大学体育の授業に着目すると目的や授業内容の詳細が示されていないことから追従実施が困難である点に課題が残されている。これらの課題を克服するためには体育科教育学で研究蓄積がされてきた体育授業の学習指導モデルに着目する必要がある。とりわけスポーツ教育モデルの適用は大学体育においても有益な示唆を与える可能性を秘めている。

2 スポーツ教育モデルの効果

スポーツ教育モデルは「有能で、教養があり、情熱的なスポーツ人」の育成を目的とした学習指導モデルである(シーデントップ, 2003, p. 3)。高橋は訳者まえがきの中で、「スポーツ教育モデルの理念は、子どもたちに真のスポーツの魅力にふれさせ、生涯スポーツを実現させることである」と述べている。さらに、「人格形成・社会性の目標が具体化され、評価システムに反映される。」と述べていることから、生涯スポーツの実現や社会性を習得する最後の教育段階となる大学教育において、スポーツ教育モデルは効果的な方法であることが考えられる。

スポーツ教育モデルには6つの特性が示されている。1つ目は「シーズン制」である。「子どもたちの学習経験や発達上の能力を考慮に入れて、有能なプレイヤー(実際の試合で戦術的プレイの面で適度なレベルに達しているプレイヤー)になるには、より多くの時間が必要になるためである。」と述べられている。2つ目は「チームへの所属」である。「チームのメンバーシップは、チームに関わったさまざまな役割や責任を与える。それらの役割や責任が、自己成長のための可能性を提供するのである。」と述べられている。3つ目は「公式試合」である。「個人やグループは、公式スケ

ジュールに向けて目標設定する必要がある。公式スケジュールを定めることによって、チームは自分たちの弱点を補うための練習を行ったり、新しい戦術の準備を整えたりして、試合に備えることができる」と述べられている。4つ目は「クライマックスのイベント」である。「スポーツ教育シーズンはクライマックスイベントで終わる。このイベントは祭典的であるべきで、スポーツシーズンにふさわしいクライマックスの盛り上がりを生み出すように計画されるべきである。それはまた、すべての参加者が積極的に関与できるものにすべきである。」と述べられている。5つ目は「記録の保持」である。「スポーツ教育においては記録が保持され、そこでの教育的経験を一層意味深いものにするために活用される。記録にはさまざまな用途がある。個人やグループのパフォーマンスに対してフィードバックを与えるために用いられ、試合のための目標を設定するために用いられることもある。」と述べられている。6つ目は「祭典性」である。「スポーツ教育において、教師はそれぞれのシーズンを祭典的なものになるように努める。チーム名をつけたり、チームのユニフォームを工夫したりすることができる。記録は公表され、個人や団体の成績が記録され、評価される。体育館はクライマックスであるイベントに向けて飾りつけがなされる。スポーツの儀礼や伝統が強調され、尊ばれる。」と述べられている。以上のような具体的な方法を活用したスポーツ教育モデルが体育授業の現場で実践され、教育的な効果が実証されている。

大津ほか（2010）は、小学生を対象として、スポーツ教育モデルを適用し、特に社会的な態度を行動目標として位置づけることの他に、フェアプレイポイントシステムを適用したり、教師が社会的な態度に一貫して関心を向け、子どもたちの行動に積極的に働きかけ（相互作用）を行ったりした場合に、体育授業場面に見られる社会的態度の変容が見られることが確かめられたと報告し

ている。また、芳賀（2007）は小学生を対象としてスポーツ教育モデルを導入したボール運動学習において、児童の社会的態度を向上させ肯定的な人間関係を形成させることに有効であることを報告している。その他にもスポーツ教育モデルを活用した体育授業は実践されている。^{注3)}

スポーツ教育モデルの特性（シーズン制、チームへの所属、公式試合、クライマックスイベント、記録の保持、採点性）を適用し、6つすべての特性を網羅した内容で実施するためには一定程度の授業時数を確保していくことが求められる。その点、大学体育授業では授業の目的や方針については大学のカリキュラムポリシーに沿った内容となるが、実施種目や具体的な実践方法については担当教員に委ねられていることが多く、裁量の余地がある。大学体育授業では多くの大学で90分の授業を15回実施することになるため、十分な時間を確保することが可能となる。岡田・和田（2019）は、スポーツ教育モデルを適用した大学体育授業の効果としてスポーツの価値観、見方、考え方が変容した。なかでも、「チーム力・コミュニケーション能力」「審判」「スポーツへの興味・関心」「楽しさ・内容重視（勝利至上主義からの脱却）」における価値観や・見方、考え方が大きく変化していったと報告している。しかし、岡田・和田（2019）が行った効果の分析方法については不明瞭であり、詳細な検討が必要である。

3 本研究の目的

本研究では、生涯スポーツ実践者の育成を目指し、スポーツ教育モデルを適用した大学体育授業が大学生の運動行動の変容に与える影響について検討することを目的とした。とりわけ、運動行動の結果と関連させて主観的恩恵に着目し、大学体育においてスポーツ教育モデルを適用することの意義についても検討する。

II 方法

1 対象者及び教師の属性

本研究ではX大学に所属する1年生90名（男性54名、女性46名）を対象に授業を行った。対象者は心理、福祉、児童教育の3つの学部に所属しており、男女混合での授業が実施された。授業者は体育科教育学を専門とする筆頭著者であった。

2 実施期間と内容

本研究は、2023年9月から2024年1月までの計15回の授業内でボッチャ、ゴールボール、バドミントン、ユニホックの4種目を実施した。種目の選定理由については以下の通りである。

まず、ボッチャはパラスポーツの中でも脳性麻痺など障害の重度が高い人でも実施できる種目であり、老若男女、障害の有無に関わらず、さまざまな違いを持った人たちが一緒に楽しむことができるため、現在ではさまざまな交流イベントが行われている。本授業においても入学年度となる1年生が対象となるため、体力や運動能力、運動経験の差がある中で、スポーツを通じて人間関係を構築していくことができるボッチャを1種目目に採用し、チームとして作戦を考案していくなど、話し合いの場面を意図的に作っていくことを目的とした。

バドミントンでは全てミックスダブルスでの試合実施し、原則として男女ペアで出場することを義務付け、できる限り能力の差が生まれないように配慮した。

ゴールボールは視覚障害者が行う対戦型チームスポーツであり、コート上には選手3名が出場する。障害の程度（視力や視野）によって競技力の差が出ないよう、選手はアイシェード（目隠し）を装着し、同じ条件のもとで競技を行うこととなっている（日本パラリンピック委員会、online）。受講者に経験者はいなかったため、出場に関するルールは全ての学生が均等に出場するこ

とのみとした。

ユニホックは6人ずつのプレーヤーからなる、2チームによってプレーする。競技は、相手チームのゴールにスティックを使ってボールをシュートし得点を競うことと、相手チームのボールを得点させないように防ぐことによって展開されるゴール型の球技であり、誰でも気軽にできるレクリエーションスポーツとして導入されたスポーツである（笹川スポーツ財団、online）。本授業においては経験者が少ないため、チーム全員で技術を高めながら作戦を検討するなど、チームワークやコミュニケーションが必要となる。15回の授業の中で終盤となる最後の種目でこれまで培ってきたチームワークやチームメイト同士の相互理解などが影響しやすい、ゴール型球技となるユニホックを最後の種目として選定した。

また、ボッチャやゴールボールなどのパラスポーツを採用した理由としては、障害者差別解消法の改正により、障害者への合理的配慮の提供が義務化され（内閣府、2023）、村山（2024）は学習指導要領のない大学においては、指導内容や方法において今後の社会を先取りした検討が一層重要であると述べており、共生社会^{注4)}の実現を目指す上で、パラスポーツは効果的であることからボッチャとゴールボールを実施した。^{注5)}

3 授業計画及びスポーツ教育モデルの適用

3-1 授業計画

本授業は以下のねらいを達成することを目的として授業を実施した。

「実施する運動・スポーツを通じて、健康づくりや運動のしくみ、各種目のルールを学び目的に応じた方法を理解することで、生涯にわたってスポーツや運動を親しむための資質や能力を育むことを目的とする。さらに、スポーツをする上で重要となるコミュニケーションスキルやリーダー&フォロワーシップの重要性を考え、創意工夫するとともに、運動技能の習熟にあわせてより優れ

た状態を目指すことをねらいとした。」

上記に記されている通り、運動・スポーツを通じてさまざまな資質能力を身に付けていくことを目的としており、目標達成ができるよう以下の通り単元計画を作成し授業を実施した。特に、生涯にわたる豊かなスポーツライフを実現していくことが重要であると考え、「する」「見る」「支える」「知る」といった多様な関わり方について理解を深め、「する」だけではないスポーツの楽しさを味わえるよう、さまざまな関わり方が経験できるよう工夫した。

3-2 スポーツ教育モデルの適用

スポーツ教育モデルは「子どもたちに真のスポーツの魅力にふれさせ、生涯スポーツを実現させることである」ことから、大学体育授業の重要な目的の一つである生涯スポーツの実現と一致している。岡田・和田（2019）ではスポーツ教育モデルを適用した大学体育授業を実践し、「グループの中で共通の目標に向かって効果的に活動する。（協力的活動）」ことへの達成度が高かったことや、「スポーツの価値観、見方、考え方が変容した」と報告しており、スポーツ教育モデルを適用した大学体育授業では運動・スポーツの実施の意義や価値を理解していく上で効果的であり、スポーツ教育モデルの中核の方法となる「シーズン制」「チームへの所属」「記録の保存」「公式試合」「クライマックスイベント」「祭典性」の6つの特性を取り入れた。

まず、「シーズン制」では、全15回の授業の中で、第1回目（オリエンテーション、チーム分け、役割分担など）の授業以外は2回目から5回目と10回目の合計5回を練習期、6回目から9回目、11回目から14回目の合計8回を試合期として計画した。練習期では基礎的な練習に加え、チームでの作戦の計画、実践的な練習を行い、試合期では授業開始から30分をその日の練習時間として割り当て、その後リーグ戦を行った。リーグ戦では

4チーム編成のリーグ戦を2試合ずつ行った。

次に「チームへの所属」では、1回目の授業内で今後の計画と内容を説明した後に、チームを編成し、15回目の授業が終了するまで同一のチームで授業を展開した。チームにおける役割分担としてキャプテン、記録係、用具係、審判係を担わせた。

次に「記録の保存」では、練習期から試合のスコアシートを記入し、チームの振り返りや次回の練習内容の検討に活用させた。また、試合期では公式の記録として保存し、クライマックスイベントとなる閉会式で発表した。具体的な記録内容としては、ボッチャではリーグ戦の勝敗と個人の投球の成功率、バドミントンではリーグ戦の勝敗とペアでの得失点、ゴールボールではリーグ戦の勝敗と個人ではゴール、ブロックの回数、ユニホックではリーグ戦の勝敗と個人ではゴール、シュート、アシストの回数の記録を保存した。また、チームでは4種目総合得点で競争し、リーグ戦の勝敗得点に加え、毎時間のフェアプレイ選手及びチームを選出し、総合得点に加算した。次に「公式試合」では上記に示している通り、授業の後半となる6回目以降から4チーム編成での各種目のリーグ戦を行い、総合得点を競った。

次に「クライマックスイベント」では、授業の最終回となる15回目で閉会式を行い、これまで記録したチームや個人の結果についての成績発表や各チームのキャプテンから15回の授業、チームや個人の結果、これまでのチームとしての取り組みについて、振り返りのスピーチを行った。

最後に「祭典性」では、まず、チーム名とチームカラーの決定を促した。チームカラーについては授業内で着用するナンバー付きのビブスのカラーを指定し、体育授業ではビブスに加えて、チームカラーが入った服装で授業に参加するよう促した。また、6回目の試合期が始まる際に開会式、15回目には閉会式を行った。開会式では具体的な試合方法の説明に加え、選手を代表して各チー

ムのキャプテンから選手宣誓、審判長からの注意などを行った。閉会式では上記の「クライマックスイベント」で説明したとおりである。

さらに、スポーツ教育モデルの主要な目標の1つである「善良な」スポーツ人の育成を達成するためにフェアプレイを重要なテーマとした。具体的には、大津ほか（2010）を参考にフェアプレイポイントシステムを採用した。所属しているチームの選手及びチーム以外でその日一番のフェアプレイ選手とチームを選出し、個人では3名、チームでは1チームをフェアプレイ賞として所属しているチームに得点を加算した。全ての受講者がフェアプレイを実践できるよう、事前に日本オリンピック委員会が発信しているフェアプレイについて説明し、受講者自身が考えるフェアプレイについて回答させ、授業全体で共有した内容を踏まえ、毎時間の質問紙調査による選出を行った。

表1 授業計画

回	目標及び内容	期分け
1	オリエンテーション、スポーツ教育モデルの理解、チーム決め、役割分担、チームの目標設定、授業の流れについての理解、フェアプレイについての理解	練習期
2	ボッチャの理解、練習及び試合	
3	バドミントンの理解、練習及び試合	
4	ゴールボールの理解、練習及び試合	
5	ユニホックの理解、練習及び試合	
6	ボッチャリーグ戦①	試合期前半
7	ボッチャリーグ戦②	
8	バドミントンリーグ戦①	
9	バドミントンリーグ戦②	
10	チームの振り返り、ゴールボール、ユニホックの練習	後半競技練習期
11	ゴールボールリーグ戦①	試合期後半
12	ゴールボールリーグ戦②	
13	ユニホックリーグ戦①	
14	ユニホックリーグ戦②	
15	振り返り、クライマックスイベント（閉会式）	振り返り

4 収集データ

4-1 運動・スポーツ活動習慣

運動・スポーツ活動習慣の行動変容については、岡（2003）の方法に従い実施した。対象者は次の5つの項目から1つを選択し、「無関心」「関心」「準備」「実行」「維持」の各ステージに分類された。「現在、運動をしておらず、今後6ヶ月以内に運動を始める意思もない：無関心ステージ」「現在、運動をしていないが、今後6ヶ月以内に運動する意思がある：関心ステージ」「現在、運動をしているが、定期的ではない：準備ステージ」「現在、定期的に運動をしているが、始めてから6ヶ月以上経っていない：実行ステージ」「現在、定期的に運動しており、6ヶ月以上経っている：維持ステージ」なお、ここでいう定期的な運動とは、1日30分以上（連続でなくてもよい）、週2日以上スポーツやウォーキングなどを行うこととして設定し、1回目の授業及び15回目の授業終了後で現在の自分の考えや行動に当てはまる変容ステージを1つ選択させた。

4-2 大学体育授業の主観的恩恵

授業の主観的恩恵については、西田ほか（2015）を参考に、対象者に受講した授業全般の振り返りを行ってもらい、そこで得られた主観的恩恵について、自由記述による回答を求めた。質問文は「今回の体育授業を振り返って、あなたが学んだこと（得られたこと、身に付いたこと、気づいたこと）を3つ『体育授業で』に続くような箇条書きで具体的に挙げてください。」と教示した。また、記入に際しては特になしという記述は避けるように教示を与えた。

4-3 調査方法

運動行動の変容については2023年9月に授業の1回目のオリエンテーションの2024年1月の15回目の授業終了後に「授業アンケート」と題した質問紙をGoogle Formsを活用して回答させ

た。主観的恩恵については15回目の授業終了後に自由記述によって回答させた。なお、回答内容から個人が特定される調査ではないこと、回答は自由意志であること、受講している授業の成績には反映されないことを説明の上、実施した。

5 分析方法

運動習慣の行動変容については単純集計を行った。主観的恩恵については、KJ法の「集めたデータから、そのデータのエッセンスをメモした紙きれ」(川喜多, 1970, p. 49)を作る「紙切れづくり」と、「親しいと感じる紙切れを集める」(川喜多, 1970, p. 58)「グループ編成」を実施した。これらの作業を共著者とともに確認しながら進め、「グループ編成」において意見が一致しない場合は、お互いが納得に至るまで議論することで妥当性を高めた。川喜田(1970)は、KJ法を行う上でデータに語らしめることが重要な原則であり、分析の際にデータに忠実に判断することが重要であると述べている。その為、1つ1つのデータにこだわり、分析対象とした大学生の記述から得られた意味を丁寧に汲み取ることが必要である。西田ほか(2015)や石原ほか(2022)では主観的恩恵についてテキストマイニングによる分析を行い、平均出現率や頻度を定量化し、カテゴリとキーワードを抽出しているが、本研究ではスポーツ教育モデルを活用した授業実践やパラスポーツの実施に加え、運動習慣の変容ステージや運動習慣の有無など、それぞれの特徴がどのように影響しているかについて、より詳細な検討をしていくために1つ1つのデータの意味を丁寧に解釈することが必要であると考え、KJ法を採用した。その中で「得られたこと」「身に付いたこと」「気が付いたこと」それぞれの回答にカテゴリを生成し、その後、運動行動の変容ステージの結果を群分けし、分類を行った。運動行動の変容ステージの結果については運動行動の変容が「向上した群(以下、向上群)」「低下した群(以下、低下群)」「運動習慣があり

変化していない群(以下、運動習慣あり変化なし群)」「運動習慣がなく変化していない群(以下、運動習慣なし変化なし群)」の4群に分けて分析を行った。

III 結果

1 運動行動の変容段階

1-1 授業前後における運動行動の変容ステージの結果

実施前後における運動行動の変容は図1の通りである。受講前では、「無関心期」が40名(47.6%)「関心期」が10名(11.9%)「準備期」が20名(23.8%)「実行期」が5名(6%)「維持期」が9名(10.7%)であった。受講後では、「無関心期」が29名(34.5%)「関心期」が24名(28.6%)「準備期」が17名(20.2%)「実行期」が3名(4%)「維持期」が11名(13.1%)であった。受講前には50名(59.5%)の学生が「無関心期」「関心期」を選択しており、受講者全体の半数以上はこれまでに運動習慣がないことが明らかになった。

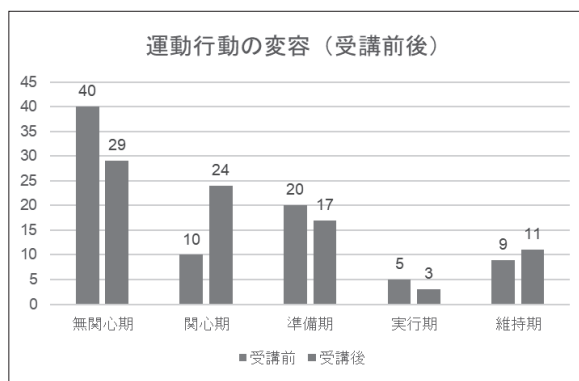


図1 授業実施前後における運動行動の変容

1-2 運動行動の変容ステージの内訳

授業実施前後の運動行動の変容ステージの内訳については表2の通りである。無関心期から関心期に移行した学生は10名(11.9%)、無関心期から準備期に移行した学生は4名(4.8%)、準備期から維持期に移行した学生は4名(4.8%)、無関心期から実行期に移行した学生は1名(1.2%)、

実行期から維持期に移行した学生は1名（1.2%）、準備期から実行期に移行した学生は1名（1.2%）、関心期から準備期に移行した学生は1名（1.2%）であった。合計で22名（26.2%）となり、これらを向上群とした。

準備期から関心期に移行した学生6名（7.1%）、関心期から無関心期に移行した学生は3名（3.6%）、維持期から準備期に移行した学生は2名（2.4%）、維持期から関心期に移行した学生は1名（1.2%）、実行期から無関心期に移行した学生は1名（1.2%）、実行期から関心期に移行した学生は1名（1.2%）、実行期から準備期に移行した学生は1名（1.2%）であった。合計で15名（17.9%）となり、これらを低下群とした。

準備期で変化しなかった学生は9名（10.7%）、維持期で変化しなかった学生は6名（7.1%）、実行期で変化しなかった学生は1名（1.2%）であった。合計で16名（19%）となり、これらを運動習慣あり変化なし群とした。

無関心期で変化しなかった学生は25名（29.8%）、関心期で変化しなかった学生は6名（7.1%）であった。合計で31名（36.9%）となり、これらを運動習慣なし変化なし群とした。

2 主観的恩恵

受講後の主観的恩恵については、表2で示した通り、運動行動の変容は向上群22名（26.2%）、低下群15名（17.9%）、運動習慣あり変化なし群16名（19%）、運動習慣なし変化なし群31名（36.9%）に分けて分析を行った。

2-1 向上群

向上群の結果は表2に示した通り分類された。計140個のカテゴリが生成され、「運動・スポーツに必要となる思考スキルの習得」が最も多く、「応援やチームワークの重要性の認識」「運動・スポーツに関する知識の習得」「運動・スポーツの楽しさ」「仲間と協力して行うスポーツの楽しさや大切さ」「コミュニケーション能力の習得と重要性の認識」「パラスポーツなど新たなスポーツの体験による知識の習得」「運動・スポーツの効果の実感」「運動・スポーツの重要性の認識」「フェアプレイ精神の習得」「運動・スポーツに対する意欲」「挨拶の重要性の認識」「運動の機会」「運動習慣」「スポーツの技術」「交友関係の広がり」「教師に必要となる知識の習得」「精神的な安定」「充実した環境」の順に19個の概念が抽出された。

2-2 低下群

低下群の結果は表3に示した通り分類された。計70個のカテゴリが生成され、「コミュニケーションの重要性の認識」「運動・スポーツに関する知識の習得」「仲間と協力して行うスポーツの楽しさの認識」「運動・スポーツの楽しさ」「運動など健康的な生活習慣の重要性の認識」「パラスポーツの楽しさや難しさ」「体力の低下など体調の変化」「運動・スポーツに必要となる思考スキルの習得」「パラスポーツの知識や技術の習得」「運動・スポーツの効果の実感」「交友関係の広がり」「フェアプレイの大切さ」「サポートや協力の重要性」「交友関係の狭さ」「教員の重要性」「運動の機会」「スポーツの技術」の順に17個の概念が抽出された。

表2 運動行動変容ステージの内訳

群分け	移行状況	人数（割合）
向上群 22名 (26.2%)	無関心期→関心期	10名 (11.9%)
	無関心期→準備期	4名 (4.8%)
	準備期→維持期	4名 (4.8%)
	無関心期→実行期	1名 (1.2%)
	実行期→維持期	1名 (1.2%)
	準備期→実行期	1名 (1.2%)
	関心期→準備期	1名 (1.2%)
低下群 15名 (17.9%)	準備期→関心期	6名 (7.1%)
	関心期→無関心期	3名 (3.6%)
	維持期→準備期	2名 (2.4%)
	維持期→関心期	1名 (1.2%)
	実行期→無関心期	1名 (1.2%)
	実行期→関心期	1名 (1.2%)
	実行期→準備期	1名 (1.2%)
運動習慣あり 変化なし群 16名 (19%)	準備期	9名 (10.7%)
	維持期	6名 (7.1%)
	実行期	1名 (1.2%)
運動習慣なし 変化なし群 31名 (36.9%)	無関心期	25名 (29.8%)
	関心期	6名 (7.1%)

表3 向上群の主観的恩恵

上位カテゴリ	下位カテゴリ	上位カテゴリ	下位カテゴリ
運動・スポーツに必要な思考スキルの習得 (22)	役割の認識 (5)	仲間と協力して行うスポーツの楽しさや大切さ (12)	仲間と協力する楽しさ (5)
	作戦立案能力 (3)		協力することの大切さ
	スポーツに必要な考え方		協調性の習得
	課題を明確にする大切さ		協力して行うスポーツの楽しさ
	課題解決の楽しさ		仲間とスポーツをする楽しさ (2)
	技術の上達方法		仲間と協力する姿勢
	スポーツのコツの習得		協調性の習得
	考える力		協力の仕方
	思考力の習得	コミュニケーション能力の習得と重要性の認識 (11)	コミュニケーション能力の習得 (5)
	戦略などの考え方		コミュニケーションを取る方法
	相手の作戦予測		仲間とのコミュニケーション (3)
	リーダーの重要性		対話することの大切さ
	思考力		話し合いの大切さ
	統率力		コミュニケーションの重要性
	苦手意識の克服		コミュニケーションが活性化
	相手への観察力		新たなスポーツの体験 (2)
	仲間の変化の気づき		バラスポーツの知識 (2)
応援やチームワークの重要性の認識 (19)	チームワークの大切さ (5)	バラスポーツなど新たなスポーツの体験による知識と技術の習得 (10)	バラスポーツの理解 (2)
	仲間意識の向上		新たなスポーツへの挑戦
	チーム力を高める力		バラスポーツの技術
	チームとしてのモチベーションの維持		バラスポーツのルール理解
	チームワークの誕生		バラスポーツの楽しさ
	チームスポーツの難しさ	運動・スポーツの効果の実感 (6)	体力の向上 (3)
	チームスポーツの戦術や戦略の重要性		全力で取り組むことによる爽快感
	チームでの活動による仲間意識の誕生		ストレスの軽減
	チームでの振り返りによるチームワークの向上		体育授業期間の体調の変化
	団結する力の大切さ	運動・スポーツの重要性の理解 (6)	運動することの大切さ (4)
	仲間への声掛け		スポーツの大切さ
	互いの教えあい		運動の重要性
	声を掛け合うことの必要性	フェアプレイ精神の習得 (5)	フェアプレイ精神の習得 (2)
	本気で運動することによる仲間意識		フェアプレイの大切さ
運動・スポーツに関する知識の習得 (15)	スポーツに関する知識の習得 (5)		フェアプレイの精神
	ルールの理解 (3)		フェアプレイの大切さ
	運動に関する知識の習得	運動・スポーツに対する意欲 (5)	積極的な声掛け
	新たなスポーツの理解		積極的な試合参加
	効率的に進めるための方法		スポーツへの積極性
	サポートの必要性の理解		プレイ中の声掛けの仕方
	ルール理解による審判の経験		負けた経験によるモチベーションの向
	安全面への理解	挨拶の重要性の認識 (3)	挨拶の習慣
	ウォーミングアップの方法		積極的な挨拶
運動・スポーツの楽しさ (14)	運動の楽しさ (3)		挨拶の重要性の理解
	スポーツの楽しさ (4)	運動の機会 (2)	運動の機会
	楽しむことの大切さ		運動するきっかけ
	スポーツの多様な楽しみ方		運動習慣 (2)
	運動による精神面の高揚		スポーツの技術 (2)
	積極的に行うことによる楽しさ		交友関係の広がり (2)
	スポーツ実践による気分の高揚		模擬授業の練習
	チームスポーツの楽しさ		教える立場としての基礎の習得
	仲間の影響によるスポーツに対する気持ちの変化	精神的な安定 (1)	精神的な安定
			充実した環境 (1)
		充実した環境 (1)	充実した環境

表4 低下群の主観的恩恵

上位カテゴリ	下位カテゴリ	上位カテゴリ	下位カテゴリ
コミュニケーションの重要性の認識 (13)	コミュニケーションの大切さ (3)	パラスポーツの楽しさや難しさ (4)	パラスポーツなど貴重な体験
	コミュニケーションの必要性の理解 (2)		パラスポーツの楽しさ
	コミュニケーションを取ることに伴うモチベーションの向上		パラスポーツの難しさ面白さ
	コミュニケーションの機会		パラスポーツの難しさ
	仲間との会話の増加	体力の低下など体調の変化 (4)	体力の低下
	仲間とのコミュニケーション		自身の体力の低さ
	意思の伝達		自身の体力の低さ
	チームメイトへの声掛け		健康への影響
	コミュニケーションによる新たな発見	運動・スポーツに必要な思考スキルの習得 (3)	自分以外の運動神経の良さの認識
	言葉掛けの重要性		状況把握能力
運動・スポーツに関する知識の習得 (8)	スポーツに関する知識の習得 (5)		集中力
	体力を消耗しない呼吸方法	パラスポーツ知識や技術の習得 (3)	パラスポーツに関する知識 (2)
	新たなスポーツへの理解		パラスポーツの技術
	ケガをさせないために必要な力加減	運動・スポーツの効果の実感 (3)	運動することでの気分転換
仲間と協力して行うスポーツの楽しさ (7)	仲間と協力しておこなうスポーツ	交友関係の広がり (3)	プラス思考
	仲間と協力して助け合いの実践		前向きな声掛け
	仲間とスポーツをする楽しさ		交友関係の広がり
	仲間と協力して行う楽しさ		親交の深まり
	仲間と協力する姿勢	フェアプレイの大切さ (3)	交友関係の広がり
	チームワークの大切さ		フェアプレイの意識
	協調性		フェアプレイの実践によるスポーツの楽しさ
運動・スポーツの楽しさ (7)	スポーツの楽しさ (3)		フェアプレイの精神
	環境設定によるスポーツの楽しさの実感	サポートや協力の重要性 (2)	チームメイトへの配慮
	スポーツを継続することの大切さ		サポートの重要性
	スポーツ参加への意欲	交友関係の狭さ (1)	交友関係の狭さ
	新たなスポーツの楽しみ方の発見	教員の重要性 (1)	教員の重要性
運動など健康的な生活習慣の重要性の認識 (6)	生活習慣の改善点	運動の機会 (1)	運動の機会
	睡眠時間の大切さ	スポーツの技術 (1)	スポーツの技術
	長期休みの過ごし方の改善点		
	運動への意識		
	健康への意識		
	健康への意識の向上		

2-3 運動習慣あり変化なし群

運動習慣あり変化なし群の結果は表4に示した通り分類された。計71個のカテゴリが生成され、「チームワークの重要性の認識」「運動・スポーツの楽しさ」「運動・スポーツに必要な思考スキルの習得」「コミュニケーションの重要性の認識」「仲間と協力することの大切さ」「運動・スポーツに関する知識の習得」「フェアプレイ精神の重要性の認識」「体力向上など運動の効果の実感」「運動不足など身体的な変化の認識」「交友関係の広がり」「運動・スポーツに対する意欲」「運動習慣」「スポーツの技術」「パラスポーツの知識」の順に

14個の概念が抽出された。

2-4 運動習慣なし変化なし群

運動習慣なし変化なし群の結果は表5に示した通り分類された。計177個のカテゴリが生成され、「コミュニケーションの重要性の認識」、「運動・スポーツに必要な思考スキルの習得」「運動・スポーツの楽しさ」「仲間と協力して行うスポーツの楽しさ」「チームワークの重要性の認識」「パラスポーツなど新たに体験したスポーツに関する知識の習得」「フェアプレイ精神の大切さ」「スポーツを通じた交友関係の広がり」「運動・スポーツ

表5 運動習慣あり変化なし群の主観的恩恵

上位カテゴリ	下位カテゴリ	上位カテゴリ	下位カテゴリ
チームワークの重要性の認識 (11)	チームワークの大切さ (2)	仲間と協力することの大切さ (6)	協力することの大切さ (3)
	チームプレイの楽しさ (2)		協力して補い合うこと
	チームワークの大切さを実感したことによる達成感		仲間とスポーツをする楽しさ
	団結する力の大切さ		協力する力
	チームワークの大切さ		スポーツの知識の習得
	チーム力向上の重要性		スポーツのルールを理解
	人に頼ることの大切さ		新たな競技の理解
	他者との感情共有による自分自身の振り返り		運動に関する知識
運動・スポーツの楽しさ (10)	団結力	運動・スポーツに関する知識の習得 (6)	スポーツへの理解の深まり
	スポーツの楽しさ (4)		ルール理解の重要性
	運動の楽しさ (2)		フェアプレイ精神の重要性の認識 (4)
	考えて行うスポーツの楽しさ		フェアプレイの大切さ (2)
	スポーツの多様な楽しみ方		尊敬する気持ち
	運動能力の差を超えて共有できる一喜一憂		感謝する気持ち
	スポーツを楽しむことの大切さ		体力の向上
			運動の効果の実感
運動・スポーツに必要な思考スキルの習得 (10)	振り返りの必要性	体力向上など運動の効果の実感 (4)	準備体操の大切さ
	効果的な指示の方法		整理体操の大切さ
	作戦立案能力		運動不足の認識
	課題発見による成長		自分自身の苦手種目
	他者との考え方の違い		体調変化の理由
	個人の特性を活かした関わり方		運動不足など身体的な変化の認識 (3)
	リフレクション能力		人間関係の広がり (3)
	強い心		交友関係の広がり (2)
	周囲への配慮		チームでの活動による新たな友人関係
	スポーツに必要な広い視野の習得		スポーツへの積極性
コミュニケーションの重要性の認識 (9)		運動・スポーツに対する意欲 (2)	積極性
			運動習慣
	コミュニケーション能力の習得 (3)		運動習慣 (1)
	コミュニケーションの大切さ		スポーツの技術 (1)
	コミュニケーションの必要性の理解		スポーツの技術
	初対面の人とのコミュニケーション		パラスポーツの知識 (1)
	コミュニケーション能力		パラスポーツの知識
	仲間との声掛け		
	チームメイトの連携		

に関する知識の習得」「運動・スポーツの大切さ」「運動・スポーツの効果の実感」「運動・スポーツの方法や技術の習得」「挨拶の重要性の認識」「運動・スポーツに対する意欲」「体力や体調など身体的な変化の認識」「運動習慣」「運動の機会」の順に17個の概念が抽出された。

表6 運動習慣なし変化なし群の主観的恩恵

上位カテゴリ	下位カテゴリ	上位カテゴリ	下位カテゴリ
コミュニケーションの重要性の認識 (24)	コミュニケーション能力の習得 (8)	フェアプレイの大切さ (12)	フェアプレイの大切さ (5)
	コミュニケーションの活性化 (3)		フェアプレイの理解 (2)
	コミュニケーションの重要性 (2)		平等に戦うことへの理解
	コミュニケーションの大切さ (2)		ルールの必要性
	初対面の人とのコミュニケーションの大切さ		一生懸命に取り組むことによる盛り上がり
	コミュニケーションの大切さや楽しさ		互いの尊重や励ましあい
	コミュニケーションの機会		互いのチームを称えあうこと
	話すことへの意欲	スポーツを通じた交友関係の広がり (11)	交友関係の広がり (3)
	声をかける勇気		スポーツによる人間関係の広がり (2)
	声をかける力		親交の深まり
	声掛けによる励まし合い		スポーツの体験による親交の深まり
	メンバーへの励まし		交友関係を広げる手段としてのスポーツ
	コミュニケーションの量とチーム成績への影響		新たな友人関係
運動・スポーツに必要な思考スキルの習得 (22)	観察力の向上 (3)		関わりのなかった人との交流
	周りを見る力 (2)		人見知りの克服
	観察することの重要性 (2)	運動・スポーツに関する知識の習得 (9)	スポーツに関する知識の習得 (3)
	作戦立案能力 (2)		スポーツの方法の理解
	役割分担の大切さ		運動に関する知識の習得
	読み取る力		スポーツの楽しみ方の理解
	個々の特性把握		スポーツの多様性の理解
	相手の行動を読む力		スポーツの種類やルール
	チーム戦術の検討		スポーツのルール
	計画立案能力	運動・スポーツの大切さ (8)	運動することの大切さ (4)
	リフレクション能力		自身のスポーツの特性
	自身の役割と行動力		スポーツの特性の理解
	問題解決への意識		スポーツに対する考え方の変化
	プレイ以外で意欲的な選手の技術の高さ		運動への考え方
	スポーツの実践による仲間の長所の気づき	運動・スポーツの効果の実感 (7)	体力の向上 (4)
	他者理解		健康への意識の向上 (2)
	他者の特性の違い		ストレス発散
運動・スポーツの楽しさ (16)	運動の楽しさ (6)	運動・スポーツの方法や技術の習得 (5)	スポーツの技術 (3)
	スポーツの楽しさ (3)		正しい身体の動かし方 (2)
	運動の楽しさへの気づき		ボール捌きの技術
	競い合う楽しさ		正しい運動の方法
	体育授業の楽しさ	挨拶の重要性の認識 (5)	挨拶の習慣
	楽しむことの大切さ		積極的な挨拶
	運動による気分の高揚		挨拶の重要性 (2)
	勝敗を気にせず楽しむことの大切さ		挨拶の大切さ
	運動・スポーツの楽しさと気分の高揚	運動・スポーツに対する意欲 (4)	積極的な声掛け
	仲間と協力して行う大切さ (9)		スポーツへの積極性
	仲間とスポーツをする楽しさ (2)		チャレンジ精神
	仲間を信頼することの大切さ		挑戦する心
チームワークの重要性の認識 (15)	協力して挑戦する	体力や体調などの身体的な変化の認識 (4)	運動することによるダイエット
	協調性		準備運動の重要性
	仲間との協力		体力の低下
	チームワークの大切さ (5)		瞬発力
	チームプレイの楽しさ (2)	運動習慣 (3)	運動習慣
	チームワークの実感		定期的に体を動かすことの大切さ
	団結力の向上		運動習慣
	チームワークと成績の関係性	運動の機会 (2)	運動の機会
	応援することの大切さ		定期的な運動の機会
	声掛けの重要性		
	仲間との交流の重要性		
	取り組む姿勢とチームのやる気への影響		
バラスポーツなど新たに体験したスポーツに関する知識や技術の習得 (15)	バラスポーツへの理解 (5)		
	バラスポーツの楽しさ (3)		
	バラスポーツの技術 (3)		
	バラスポーツの難しさ (2)		
	バラスポーツの経験による交流の方法		
	新たなスポーツの楽しさの実感		

IV 考察

運動行動の変容について、授業実施前後で向上した学生は26.2%、低下した学生は17.9%、変化しなかった学生は56%であった。変化しなかった割合の中でも、運動習慣がある学生は19%、運動習慣がない学生は36.9%であった。無関心期が減少し、関心期が増加しており、運動やスポーツへの興味・関心が高まったことが予測されるが、運動習慣がない学生については準備期より上の段階となる運動を実践している段階に進んでいる学生はほとんど確認されなかった。週1回の体育授業では運動・スポーツを実施することで興味・関心を高めることは可能であるが、運動習慣の定着には繋がらないことが明らかになった。運動の機会を保証することは可能となるが、学生自身は授業以外で運動の機会を作るのは困難であることが考えられる。スポーツ庁が行った「スポーツの実施状況等に関する世論調査」でも同様の質問がされており、無関心期は17.6%、関心期は4.2%、準備期は33.8%、実行期は4.1%、維持期は40.3%となっている。本研究の対象となっている学生と比較する運動習慣がある人の割合が少なく、無関心期となる運動・スポーツの実施に対する「無関心層」の割合が多いことが明らかになった。これについてはさまざまな要因が考えられる。

望月ほか（2021）は大学生のスポーツライフの実態調査において、運動を行っていない学生の運動をしない理由として「機会がない」、「アルバイトで忙しい」、「他の趣味や遊び」、「勉強で時間がない」などが上位の理由として挙げられていることを報告している。本研究においては理由等についての調査は行っていないが、受講している学生からは授業の際に「課題が多くて寝不足です」、「アルバイト多くて休みがないです」、「通学時間が長いので自分の時間がないです」などの会話が見受けられ、望月ほか（2021）と同様にさまざまな理由で運動を行う時間がな

いことが考えられる。

主観的恩恵については運動行動の変容段階を、向上群、低下群、運動習慣あり変化なし群、運動習慣なし変化なし群に分けてカテゴリを抽出した。「思考スキル」「チームワーク」「コミュニケーション」「運動・スポーツの知識・技術・大切さ・楽しさ・効果」「フェアプレイ」「パラスポーツの知識や技術」「仲間との協力」「人間関係の広がり」などのキーワードについてはすべての群で共通して確認されており、受講者全体を通して感じられた主観的恩恵であることが考えられる。西田ほか（2015）の結果においても「コミュニケーション」「友人関係」「運動技術」「運動方法・ルールの理解」「チームプレー」など共通したキーワードが確認されており、大学体育授業で受ける共通の恩恵であることが考えられる。

本研究で抽出された「思考スキル」「フェアプレイ」「仲間との協力」についてはスポーツ教育モデルを活用した影響であることが考えられる。具体的には、15回を通して同じチームで競い合ってきたことで、毎時間実施している作戦タイムなどでは戦術や戦略、メンバーの選定など、種目によってさまざまな観点で話し合うことが必要となり、思考スキルを高めながら自然とチームワークが育まれてきた。

フェアプレイについてはオリエンテーションの際に、授業者からのフェアプレイについての説明と受講者が考えるフェアプレイの共有、さらには毎時間のフェアプレイ選手・チームの選出の影響により試合中だけでなく、準備やチームでの練習や作戦タイムなどでもフェアプレイについて考えていることによってフェアプレイが知覚されたことが考えられる。

また、パラスポーツに関するカテゴリについては、先行研究からは見られなかった結果であり、パラスポーツ（ボッチャ・ゴールボール）を取り入れたことによる影響であることが考えられる。具体的には下位カテゴリにおいて「障害者と一緒

に楽しめるスポーツがあること」「目が見えなくても楽しめるスポーツがあること」「ボッチャやゴールボールなどの競技を通して目が見えなかったり足が不自由で動けなかったりする人が運動するときに感じる事が身に付いた」など、パラスポーツの体験によって、視覚障害の中でスポーツを行う困難さやサポートの重要性など障害やパラスポーツへの理解が深まったことが考えられる。

それぞれの群ごとにみると、低下群や運動習慣なし変化なし群では体力の低下や体調の変化に関するカテゴリが他の群より多く抽出されていた。運動習慣の減少や元々運動習慣がない学生にとっては1週間に1回の運動の機会となるため、一生懸命にやればやるほど過去の自分との差や体力の変化を実感する機会となったことが考えられる。一方で運動習慣なし変化なし群の中には体力の向上やストレス発散など「運動・スポーツの効果の実感」を知覚している学生もあり、運動習慣がない学生が体育授業を通じて運動・スポーツをポジティブに捉えていたことは大学体育授業の価値や必要性を高めることができたと考えられる。

V 結論

本研究は、生涯スポーツ実践者の育成を目指し、スポーツ教育モデルを適用した大学体育授業が主観的恩恵に与える影響について検討することを目的として、運動行動の変容と主観的恩恵の関係についても検討することとした。その結果、運動行動の変容ステージが向上した学生は22%、低下した学生は17.9%、変化がなかった学生は56%であった。

主観的恩恵については、「思考スキル」「チームワーク」「コミュニケーション」「運動・スポーツの知識・技術・大切さ・楽しさ・効果」「フェアプレイ」「パラスポーツの知識や技術」「仲間との協力」「人間関係の広がり」といったカテゴリに

ついては全ての群で共通して抽出された。低下群では体力の低下や体調に関するカテゴリが抽出され、運動不足などの影響による体調の変化を認識する契機となることが明らかになった。

また、スポーツ教育モデルの適用により、「思考スキル」「仲間との協力」「フェアプレイ」を認識した可能性が示された。

以上のことから、成人期に突入する時期となる大学の体育授業で、スポーツ教育モデルを適用することは生涯スポーツ実践者育成に貢献できる可能性が示唆された。本研究では運動行動の変容ステージと主観的恩恵の影響について検討したが、今後は受講する学生の日常生活や運動の実施状況など、運動行動の変容ステージに関連する項目についても調査し、その関係性についても検討していくことが必要であり、今後の課題としたい。

【注】

- 1) 大学体育授業においては、社会人基礎力、健康づくり、コミュニケーションスキル、ソーシャルスキル、ライフスキル、身体活動量など（松本、2011、木内・橋本、2012、高山、2014、奈良、2015、引原ほか2016.）さまざまな観点から体力の向上や健康に関する知識の習得が目指され、現在ではオンラインを活用した授業の効果検証（小倉ほか、2021、志村ほか、2021）も行われている。
- 2) 主観的恩恵とは、授業を学修した結果として生じた学生自身の種々の学びや気づきといった有益性の知覚のことであり（Wilcox et al, 2006）、西田ほか（2015）は、学生が運動行動や運動行動意図を高めるためには、大学体育授業を受講した学生自身がどのような恩恵を享受したと具体的に知覚しているかを明らかにしている。
- 3) スポーツ教育モデルの実践事例として、吉松（2006）、伊藤ほか（2009）、福ヶ迫（2012）などが報告されている。
- 4) 共生社会とは「これまで必ずしも十分に社会参加できるようななかった障害者等が、積極的に参加・貢献していくことができる社会である。それは、だれもが相互に時間書くと個性を尊重し支え合い、人々の多様な在り方を相互に認め合える全員参加型の社会」（文部科学省、online）を意味する。
- 5) 江藤・三田（2021）は中学生を対象にゴールボール

を教材とした授業を実践し、障害者スポーツには、ほかのスポーツと同様に人生、社会、世界、未来とかかわる価値や障害者スポーツ独自の共生や生活に活用といった価値が内在することが示唆されたと報告している。パラスポーツの実践によって、障害者への理解の促進や、障害者イメージが変容したことが報告されている。また、岡田ほか（2021）は大学生のシッティングバレーボール体験が「身体障がい者イメージ」に与える影響について、障がいの能力に対する評価が高まったことにより「社会的不利」イメージが変容したことを報告しているなど、パラスポーツを活用した体育授業及び体育的な活動によって、障害者への理解が深まっていくことや障害者へのイメージが変容していくことが明らかになっている。

【引用・参考文献】

- 荒井弘和・木内敦詞・浦井良太郎・中村友浩（2009）運動校の変容ステージに対応した体育授業プログラムが大学生の運動習慣に与える効果。体育学研究，54：367－379.
- ダリル・シーデントップ（2003）高橋健夫ほか訳：新しい体育授業の創造－スポーツ教育の実践モデル－。大修館書店，p7－51.
- 江藤真生子・三田沙織（2021）体育授業における障害者スポーツの教材価値に関する検討。琉球大学教職センター紀要，3：1－11.
- 福ヶ迫善彦（2012）中学校体育授業においてスポーツ教育モデルを適用した実践的検討。体育授業研究，15：18－27.
- 芳賀修一（2007）肯定的な人間関係をつくるボール運動学習－スポーツ教育モデルを取り入れた授業実践を通して－。体育科教育学研究，23（1）：17－23.
- 引原有輝・森田啓・若林斉・金田晃一（2016）実技種目の異なる大学体育授業が社会人基礎力の育成に及ぼす影響。大学体育スポーツ学研究，13：16-25.
- 伊藝修策・高良義樹・小林稔・岩田昌太郎（2009）スポーツ教育モデルの適用が運動意欲に及ぼす影響－小学校6年生を対象とした「二種競技」の実践から－。琉球大学教育学部附属教育実践総合センター，16：117－126.
- 石原一成・三村達也・銘莉淳・石原礼子（2022）主観的恩恵および身体活動量からみたコロナ禍における大学体育授業の教育効果。福井県立大学論集，57：45－61.
- 川田公仁・山本（1999）大学体育の授業における障害者スポーツの試み－シッティングバレーボールを用いて－。つくば国際大学研究紀要，5：111－122.
- 川喜田次郎；続・発想法－KJ法の展開と応用－中公新書，1970.
- 木内敦詞・橋本公雄（2012）大学体育授業による健康づくり介入研究のすすめ。大学体育スポーツ学研究，9：3-22.
- 小泉岳央・藤原修一（2020）中学校保健体育科におけるゴールボールの単元開発－毎時間の学習カードの記述内容に着目して－。千葉大学教育学部附属中学校研究紀要，50：19－27.
- 小泉岳央・伊藤雅広・奥村拓朗・竹内孝文・藤原修一・河野漢広・佐藤翼・近藤智靖（2022）中学生の体育における共生のイメージの変容－フロアバレーボールの学びを通して－。日本体育大学大学院教育学研究科紀要，6（1）：1－20.
- 松本裕史（2011）「体育の宿題」が女子大学生の日常身体活動量および身体活動の心理学的変数に及ぼす影響。大学体育学研究，8：55－64.
- 益川満治・東条佳史・園部豊・佐藤彰（2012）女子美術大学生における大学体育授業の実施が運動行動の変容ステージおよび運動セルフ・エフィカシーに与える影響。運動とスポーツの科学，18：117－123.
- 宮原祐徹・木庭有美子・寺岡千恵子（2015）女子大学新入生の運動行動変容ステージ別の体力、身体活動、および運動セルフエフィカシー。比治山大学紀要，22：187－197.
- 望月拓実・柴田紘希・斎藤麗・菅谷美沙都・横山剛士・石井十郎・川崎登志喜・藤田雅文・中路恭平（2021）大学生のスポーツライフの実態からみる生涯スポーツ普及に向けた課題の検討。体育・スポーツ経営学研究，34：45－63.
- 文部科学省（online）共生社会の形成に向けて。
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1325884.htm.（参照日2024年12月10日）
- 文部科学省（2010）スポーツ立国戦略 5つの重点戦略の目標と主な施策 1. ライフステージに応じたスポーツ機会の創造。
https://www.mext.go.jp/a_menu/sports/rikkoku/detail/1297209.htm（参照日2024年12月10日参照）
- 村山光義（2024）大学体育の未来と課題を探る。大学体育スポーツ学研究，21：1－12.
- 内閣府（2023）障害者差別解消法に基づく基本方針の改定。
https://www.cao.go.jp/press/new_wave/20230331_00008.html.（参照日2024年12月10日）
- 奈良雅之（2015）『大学体育学』の振り返りと展望。大学体育スポーツ学研究，12：3-12.

- 西田順一・橋本公雄・木内敦詞・谷本英彰・福地豊樹・上条隆・鬼澤陽子・中雄勇人・木山慶子・新井淑弘・小川正行（2015）テキストマイニングによる大学体育授業の主観的恩恵の抽出：性および運動・スポーツ習慣の差異による検討．体育学研究，60：27－39.
- 日本パラリンピック委員会（online）競技紹介 ゴールボール．
<https://www.parasports.or.jp/paralympic/sports/goalball.html>.（参照日2024年12月10日）
- 高山昌子（2014）ライフスキル獲得を目指した授業実践：創作レクリエーションダンスを通しての学生の変化．太成学院大学紀要 16：73-77.
- 小倉圭・道上静香・榎本雅之（2021）日常生活のセルフモニタリングおよび運動課題を中心としたオンライン体育授業の実践とその効果の検討．大学体育スポーツ学研究，18：97－111.
- 岡浩一朗（2003）中年者における運動行動の変容段階と運動セルフエフィカシーの関係．日本公衛誌，50（3）：208－214.
- 岡田雄樹・和田博史（2019）大学体育における授業モデルの検討－スポーツ教育モデルの適用可能性－．日本福祉大学スポーツ科学論集，2：35－46.
- 大津展子・細越淳二・高橋健夫（2010）体育授業における社会的な行動の変容に関する検討－スポーツ教育モデルの実践を通して－．スポーツ教育学研究，29（2）：17－32.
- 笹川スポーツ財団（online）ユニホック いつでも、どこでも、誰とでもできる、スウェーデン生まれのワールドスポーツ．
<https://www.ssf.or.jp/knowledge/dictionary/unihoc.html>.（参照日2024年12月10日）
- 重藤誠市郎・山崎享子・John Patrick Sheahan・奥田功夫・長谷川望・一川大輔（2020）主体的にスポーツ実技を選択履修する大学生の運動セルフエフィカシーとレジリエンスの特徴－スポーツ実技履修者と健康スポーツ心理学履修者の心理的変容からの検討－．大学体育スポーツ学研究，17：3－11.
- 志村広子・森山進一郎・久保田浩史・鈴木聡（2021）Web会議システムを活用した大学体育実技の同期オンライン型授業の実践及び課題と展望の検討．東京学芸大学紀要芸術・スポーツ科学系，73：211－225.
- スポーツ庁（2024）「令和5年度スポーツの実施状況等に関する世論調査」結果の概要．
https://www.mext.go.jp/sports/content/20240327-kensport01-000034684_1_2.pdf.（参照日2024年12月10日）
- Wilcox, S., Ananian, C. D., Abbott, J., Vrazel, J., Ramsey, C., Sharpe, P. A., and Brady, T. (2006) Perceived exercise barriers, enablers, and benefits among exercising and nonexercising adults with arthritis: Results from a qualitative study. *Arthritis & Rheumatism*, 55：616-627.
- 吉井健人・大友智・深田直宏・梅垣明美・南島永衣子・上田憲嗣・宮尾夏姫・友草司・西田順一（2017）小学校体育授業の器械運動領域におけるスポーツ教育モデルの有効性の検討－仲間関係に着目して－．群馬大学教育実践研究，34：197－205.
- 吉松浩（2006）スポーツ教育モデルによるフライングフットボールの実践－運動有能館の分析を通して－．体育授業研究，9：93－101.

（2025年1月6日受理）

「育英大学研究紀要」第7号 正誤表

「育英大学研究紀要」第7号 の下記のページに誤りがありましたので、以下のように訂正いたします。

頁	訂正箇所	誤	正
P48	左 24 行目	本研究は、生涯スポーツスポーツ実践者の	本研究は、生涯スポーツ実践者の

(2025 年 6 月 3 日現在)

「育英大学研究紀要」

第7号 (2025 年 2 月)

発行者: 育英大学 育英短期大学